

Multi-sensory Approaches to English Education

for the Students with Hidden dyslexia

G0217002 大下 美優

近年の特別支援教育は需要が拡大し、その対応と改善が検討されている。ただその中で、通常学級で困り感(学習に何らかの困難性)を抱える児童生徒は少なくない。学校教育現場において困り感を抱える子どもたちをサポートする方策を検討した。さらに、学習障害をもつ子どもたちへの通級指導を初めとした $+\alpha$ のサポート方法を具体的に提案することを目的とした。構成としては、第2章で特別支援教育の現状を、続く3章では各種の障害における特別支援学級・通級指導における取り組みを概観した。第4章からは個別指導における英語教育について論じ、第5章では、先ず、学習障害児への多感覚学習法を用いた個別指導について検討し、最後に、特別支援システムや具体策の現状を記述し、英語圏での支援策を参考にしながら作成した指導案を提案した。以下、より具体的に論旨を詳述する。

特別支援教育が本格化してきたのは平成13(2001)年からである。支援教育の始まりは、明治から昭和初期にかけてで、盲・聾教育が行われていた。その後、需要に合わせて、知的障害教育や肢体不自由児に向けた教育などが展開されてきた。近年は、器質的障害に加え、発達障害などにも需要が拡大している。それに伴って、学校などの支援機関では支援方法を幾度も改定し/修正を施してきている。具体策として、新たに特別支援学級や通級指導クラスを展開し、各障害に応じた適切なサポートを行っている。そのうち、通級指導とは児童生徒が通常学級において学習を行うと共に、サポートとしてもう1つの補助的支援を行うクラスで学習の補てんをする支援方法の1つである。通常学級で困り感を抱き、学びきれなかったものを通級指導において補助を行う方法である。

第3章では、視覚障害・聴覚障害・学習障害に分けて、それぞれに必要な支援システムやサポートの具体策を明らかにした。学習障害のみについて言えば、支援の対象は学習障害をもつ疑いのある児童生徒で、学習や生活に何らかの困り感を抱く子どもたちである。そうした生徒に向けて、教育現場での現状は学習の補助を目的とした支援や職業体験

をさせることである。近年、学習障害児に対する支援の需要は視覚・聴覚障害に比べると大幅に拡大している。しかし、今後の課題点として、他の障害も複数もち併せる生徒がますます増加することが予想されるため、各学校・学級・支援者間での連携や連絡の精通性、支援知識の充実が必要である。

第4章においては、先ず、英語圏での学習障害児に対する支援方法をまとめた。次に、そうした支援方法が日本語を母語とし、英語を外国語として学習している児童生徒に対しても応用可能であるかどうかを検討した。イギリスで使用されているサポート方法の中で、多感覚学習法という支援方法が応用可能であると考えられる。多感覚学習法とは、学習の際に1つの感覚器だけではなく複数の感覚器を同時に用いて学習を行う方法である。文字と音韻の認識及び、それらのマッチングが容易にできるように訓練をする学習法である。具体的に言えば、アルファベット文字の書きに学習の困り感を抱いている場合には、ただAからZまで学習していただくだけではなく、空書きやクリアファイルなどを使ってなぞり書きを行う、さらにはモールや粘土を使って文字の形を認識していく学習法を用いる。最後に、第5章では、多感覚学習法を援用して、各学習セッション(アルファベット、英単語、文構成)の読みと書きに分けて指導案を作成した。各学習セッションでの学習の課題点を明らかにしながら、ブロックやクリアファイル等の補助教材を活用しながら、多感覚を用いて習得していくことのできる指導案を提案した。

通級指導の需要が拡大する一方で、現実には、現場の教科指導において、支援体制・支援対策が充実していないことが問題視されてきた。そうした課題に対する様々なアプローチを調査した結果、支援策の軸となりうるものとして、多感覚学習法が有効であることを明らかにした。それらの研究を踏まえて、学習セッション毎に指導案を作成した。

本論で考察した英語教授法は、これから教壇に立って指導を行う際に、大きな指針ともいべきものになったと自負している。むろん、今後、英語教育の現場でその有効性を検証していく必要がある。生徒1人ひとりをよく観察し、どのような学習方法が適しているかを常に考える必要がある。今後は、大学院で身につけ、学んだことを基に、さらに英語教育分野や学習支援の分野で研鑽を積んでいきたいと考えている。